

新年号

ねじりはちまき



謹んで新春の御祝詞を申し上げます

旧年中は皆様には格別のお引立てを頂き、誠に有難く厚く御礼を申し上げます。当本年も相変わらず御愛顧の程、宜しくお願い申し上げます。

皆様ご家族お揃いで良いお年を頂き、おめでとうございます。
お正月とは、家族の幸せを守る歳神様をお迎えして、その年の豊作を祈願する行事のことで、歳神様が降りて来る時の目印にするのが門松、神様が宿る神聖な場所の印となるのがしめ縄（しめ飾り）です。
そして、初夢では一富士二鷹三なすびがおめでたいとされています。
もし悪い夢をみたら、その悪い夢の絵を川に流すと良いそうです。
松の内が終わる7日、七草粥は正月で疲れた胃袋を休ませる馳走ですね。
そして、小正月「女正月」ともいいます。
正月で疲れた主婦が、一息つくための日とされています。

この頃が寒い最中です。
お体を大切にしてください。
この1年の皆様の御多幸を心より御祈り申し上げます。

幸田 常一

明けましておめでとうございます。

去年は、新築住宅からリフォームと幅広く仕事をさせて頂き、有難うございました。

福島市の工事を管理することになり、「福島市の夏はとても暑いよ。」と聞いていましたが、本当ですね、頭がジリジリしました。

熱中症の症状にも個人差があるようなので、対策はしっかり行い緊急時の対処も学ぶことは大事だと思いました。

今年も現場管理は十分に行い、安全対策で事故がないようにしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

専務取締役 渡辺正勝



去年もお世話になりました。

毎年のことながら、年々1年があつという間に終わってしまうように感じます。さて去年は、森林・企業除染などをやらせて頂きましたが、ようやく除染作業も終わりが見えてまいりまして、自社の担当分の作業もほぼ終わることができました。

振り返ると、除染作業が始まりまして6年目となり、終えてみると長かったような短かったような、といった気持ちです。

本年からはまた建築の方に戻ると思いますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

本年もよろしくお願い致します。

常務取締役 鈴木信義



昨年も大変お世話になりました。
本年もよろしくお願い申し上げます。

私事ですが、縁あって昨年5月頃、大きな黒ねこを引き取りました。
人懐こいねこで、すぐ家の環境にも慣れ、今ではストーブの前で警戒心のけの字
もないような格好で熟睡しています。

ねこを引き取って半年になりましたが、私たち家族にもよい変化がありました。
ねこを通して、ご飯あげたか？、今日はねこがこんな事をしていた。
など、会話が以前より増え、ペットってすごいなと実感しています。
今年も、家族とねこ仲良く過ごしていきたいと思います。

佐藤 美穂

* * * * *

昨年は大変お世話になりました。ありがとうございました。
自社に入社し、今年の4月で9年になります。
私事ですが、昨年4月にプリンセス(長女)が誕生し、賑やかな新年を迎えており
ます。(*^_^*)
第1子を授かり、益々仕事にも精進して行く所存です。
本年も笑顔いっぱい頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

渡辺 正吾

* * * * *

明けましておめでとうございます。
昨年は何かとお世話になりまして、ありがとうございました。
お陰様で、良き新年を迎える事ができました。

本年も昨年同様頑張りますので、よろしくお願いいたします。

国分 務

動物カメラマン

岩合光昭という動物カメラマンをご存知だろうか。NHKBS テレビで「世界ネコ歩き」という番組をご覧になっている方はご存知のはず。小生も岩合カメラマンを知ったのはこのテレビ番組を見てのことだ。よくもまあ、根気強くネコと付き合っているものだ、ネコの生態をよく観察し、カメラで捉えているものだと感心して見ていた。我が家ではネコは飼っていない。従って、小生はその生態は全くわからない。先ず笑えない話だが、岩合のビデオカメラに捕らえられたネコたちを見て、世界各地のネコの生態は、どこも共通なのだと改めて認識した。岩合のビデオカメラに登場するネコは、カメラに写されることを意識しているように感じられる、優しい目を向けている。ネコと対話する岩合の声も入る。ネコと対話しながらカメラを向けているのだ。ある時の番組で、岩合がどんな心構えでネコの生態をカメラで捕らえているのかを紹介していた。それを見て驚いた。それは、全くネコに寄り添うようにして、ネコと対話している岩合の姿であった。ネコが寝ていれば、傍に寝そべって目を覚ますのを待って、目を覚ますと目を合わせて対話し、そして体をさすってやる。いわば、相手の立場、ネコの気持ちになりきる。そうすると、ネコは岩合を仲間として受け入れてくれる。やがて、ネコが動き出す。と、ネコはついてきておくれというような行動をとる。そのネコの行動を追跡し、カメラを動かす。そうして、自然体としての生態が記録される。そのように小生は受け止めた。岩合も言っていたが、自分は人間だ、お前(ネコ)と違う存在だという観念を脱ぎ捨てるようにするのが肝心なのだ。つまり、ネコの警戒心を解くのだ。ふつう、ネコより人間の方が利口で、偉いと思っている。ペットを飼っている人たちはどんな気持ちで接しているのだろうか。しつけとって、主人のことをきちんときくようにさせているのか。それとも家族の一員としてやさしく扱い、時にはそれが過剰になってしまっているケースもあるのか。

さらに岩合のこと。岩合は、最近世界各地のネコの動画を紹介しているが、実は彼はいわゆる動物写真家としてアフリカのサバンナを始め、世界各地で動物の写真を撮ってきている、その分野での実力者なのだ。彼の著書の一つに「野生動物カメラマン」というのがある。取り寄せて読んでみた。その本の紹介の帯にこう記されている。「彼の真骨頂は野生動物の撮影にある。サバンナでライオンの母子が鼻をくっつけ見つめ合う姿、中国奥地で80センチの至近距離から撮ったジャイアントパンダの授乳シーン、アラスカの海でザトウクジラが見せた迫力のバブル・ネット・フィーディング……。なぜそんな劇的瞬間が彼だけに撮れるのか」。そこに岩合の野生動物に寄せる思いの秘密があるということだ。その秘密は、「見られているのは人間だ」という岩合のことばにあるようだ。さらに彼はいう「野生動物を撮影する時は、まず“見る”ことを重視する。・・自分の目で見たこと、さらに五感でキャッチしたことをもとに自然と体を動かす。その一環として、動物と同じ行動をとってみることもある。」と。それに加え、彼は「動物の目にはどう見えるんだろう？動物の五感はどう感じているんだろう？という視点で動物に接している」というのである。そこまで考えているのかと驚いてしまう。考えてみれば、動物の立場になりきるというのはなかなか難しいことである。しかし、そこまでいかないと、動物のありのままの生態が見えてこないのかも知れない。また、岩合は言う「野生動物を撮影する時には“待つ”という意識を持たないようにしている。目的とする動物がなかなか現れなくとも、空や雲、景色、植生、ほかの動物の様子など、周囲の環境に目を向ける。そうすると、待っている意識なく、楽しく待つことができる。」と。早く現れないかとイライラしては、いざその場面が到来しても望む写真は撮れないということだろう。なかなかできないことである。ここで岩合の動物撮影の真骨頂の話。先に触れた「ジャイアントパンダの授乳のシーン」のことを本から紹介したい。岩合は2003年と2004年に野生パンダ撮影のために中国陝西省の佛坪自然保護地区を訪れる。野生のパンダに出会うのは難しく、2年間で出会

えたのはわずか五頭だった。授乳のシーンはそのうちの一つ。パンダと出会うには標高2000m前後の山岳地帯をアップダウンしながら歩くことになる。パンダの主食となる竹林や出産に使えるような岩穴があるところを探す。それでもなかなか見つからない。そんなある日、「パンダがいた」という知らせが入る。30m下の岩穴にいる赤ん坊と一緒に母パンダを見つけ、撮影を始めたらずぐ姿を消してしまう。その日はそれで終わり。翌日から母子パンダの姿を追うがなかなか見つからない。数日後のこと。ベテラン調査員から「パンダがいた」という報が入る。「竹林の中で静かにしているから、皆で行かないで、岩合さん一人で行ってほしい」というのだ。10分位の距離だが、竹林は鬱蒼として前がよく見えない、落ち葉が積み重なっているところを音立てないように進まなければならない。そんな状況下でとにかく前に進んでいくと、あのパンダと出会う瞬間が突然訪れる。パンダとの距離は80cm。驚きの声を呑み込んで静かに三脚を立てて撮影を開始する。最初のうちパンダは岩合に背中を向けるようにして体を丸め、赤ん坊を隠していた。そこで岩合は心の中で話しかけたというのだ。「ぼくは悪者ではありません。どうか赤ちゃんを見せてください。」と。それから7分位たったころ、パンダは頭をあげて、赤ん坊を見せてくれた。そして鳴く赤ん坊をなめて、授乳を始めたのだ。その様子をじっくり撮影することができた。でも、パンダにストレスを与えないよう撮影は20分で切り上げた。撮影を終えて岩合は不思議に思えるのだった。「前はすぐ姿を眩ましたのに、今回はなぜ逃げようと思えば逃げられるのに何故に逃げなかったのか」だ。よくわからないが、パンダの立場に立った思いやりがパンダに警戒心を抱かせなかったのか、その場所がパンダにとって余程居心地がよかったからなのか、のいずれか、両方か。皆さんはいかが思われるでしょうか。

次に、ライオンのこと。岩合がアフリカのサバンナで「ライオンの母子が鼻をくっつけ合う」瞬間を撮ったと紹介したが、この写真を見て感動で涙を流してしまう人がいるそうだ。岩合は、よく「ライオンは怖くないのか、危険を感じないのか」と聞かれるが、「僕は怖いと思ったことも、危険を感じたこともない」という。例えばある時のこと。岩合は地面に這いつくばって正面から歩いてくるライオンにカメラを向けていた。ライオンはどんどん近づいてくる。でも不思議と、恐怖も危険も感じなかった。それよりも、寄ってきてくれるのがうれしかったと、岩合はいう。その結果はどうであったか。「ライオンたちはそんな僕にちらっと視線を投げかけながら、そのまますぐ横を堂々と通り過ぎていった。」のである。思わず、ウンと唸ってしまう話である。でもそういう心境でないと、人に感動を与えるような写真は撮れないと思う。岩合のことばをさらに引用しよう。彼は言う「僕は動物たちを自分に引き寄せて考えることに抵抗がある。人間のフィルターをはずして、“動物たちの目には自分はどう見えるのだろ”という視点で接している。だから、ライオンを見て人間と同じだなと思うよりは、人間を見てライオンと同じだなと感じることのほうが多いくらいである。」と。これは哺乳類同志という意味か、どうもそれ以上の深い意味、生命存在に対する岩合の深い愛を感じるのであるが、皆さんはいかがか。岩合の本を読むと、驚きの連続である。我々の常識を超えているとっていい。岩合は対象の動物と心が通じ合える、対話ができるのである。そこには人間と動物の垣根がない。それは永い年月の積み重ね、動物の触れあいの中で得られた尊い、心の宝ものといえる。

「ヤマヲ ダンネン」

幸田建設の社報をご愛読の皆様、新年明けましておめでとうございます。新年に当たり、皆様方のご健康を心からお祈り申し上げます。

不肖私は、今年の5月で87歳を迎える事になります。私はk市にある山岳愛好会（以下「山岳愛好会」と書きます。）を昨年末に退会させて頂きました。退会の理由は加齢に伴い耳が遠くなってしまった事、筋力が衰え足腰が十分機能しなくなってしまう事を自覚したからです。山には世間の常識が通用しません。タクシーを呼んでも来ませんし、医者もいません。結局、自己責任と仲間に迷惑を掛ける事になります。私にとって「山」は、生き甲斐の一つでもありました。今は、限りない寂しさを味わって居ります。

山岳愛好会に入会させて頂いたのは、今から20年程前になります。この山岳愛好会に入会させて頂いたのは勿論、私が大の山好きであり、山岳愛好会の先輩の推薦もあったこともあります。入会して初めて知りましたが、山岳愛好会の皆さん方は、例外なしに全員が親切であり、この世の幸せを体現したような方達ばかり揃っていました。不肖の私が20年もの長い期間を、事故にも合わずに退会させて頂けるのも、山岳愛好会の皆様のお蔭であると心底から感謝をしております。

山岳愛好会の月例山行については、幸田建設社報で度々報告させて頂きましたが、どの月例山行も思い出に残るものでした。改めて振り返ってみますと、標高の高い順で記しますと、富士山3776m、次いで北岳3193m、奥穂高岳3193m、と足下おさめることができました。このほかに三大霊山といわれている富士山、立山（雄山）、白山の頂きに立つ事が出来ました。また、駒ヶ岳では甲斐駒、木曾駒の山頂にも立ちました。県内の最高峰である、燧ヶ岳（福島県以北の最高峰、2356m）をはじめ飯豊山、磐梯山、会津駒ヶ岳、安達太良山、吾妻山の頂に立つ事も出来ました。また、東北北海道の主要な峰々も足下に納める事も出来ました。これらの頂きからの眺望が素晴らしい事は言うまでもない事ですが、山では誰も力を貸してくれません。自分の足で1歩ずつ登らないと、山頂に立って眺望を楽しむ事は許されません。長い人生と同じではないかとも考えております。

前に登山は総て自己責任と書きましたが、登山計画の策定からバスの手配、山小屋の手配等は山岳愛好会の分担です。

山岳愛好会がなければ私の登山は不可能です。楽しい思い出をたくさん与えて下さった山岳愛好会の皆様のお蔭であり、誠にありがとうございました。

また、日々食事の関係含めて、健康管理に心を砕いている家内のお蔭と感謝の心

